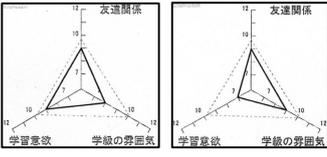


<p>III 研究の結果</p>	<p>1 SSTに関する対象児童の自己評価の変化</p> <p>学習の振り返りも、標的スキルの決定も、「わからない」と答えたり、選択肢全てに○をしたりしたことが多く、対象児童の意識の変化を理解し、標的スキルの定着を目指した自己評価カードは、評価方法としてあまり適していなかった。一方、全てのSST後の振り返りでは、「友達と少し仲よくなった」、全てのスキルを「少し気を付けるようになった」と肯定的な回答をした。</p> <p>2 Hyper-QUによる対象児童と学級の児童の意識の変化</p> <p>(1)対象児童</p> <p>学級内で認められることが少ない「非承認群」から不安傾向が強い「学級生活不満足群」へ移った。交友関係では、「仲よしの友達が増えた」、「学級の友達同士が協力できるようになった」とする一方で、「嫌な思いをする場面が増えた」と答えた(図1)。基本的なソーシャルスキルはある程度身に付けているが、考えの表出、友達との関係づくりに課題を感じている。</p>  <p>図1 学校生活意欲の変化[6月、12月]</p> <p>(2)学級の児童</p> <p>全体的に学習意欲が高く、友達とよい関係を築いており、基本的なソーシャルスキルを概ね身に付けていると捉えられる。しかし、学級満足度の高い児童と低い児童の二極化の傾向が見られ、不安や緊張感をもつ児童がいる可能性がある。</p> <p>3 観察所見の変化</p> <p>行動観察チェックシートによると、学習が進むにつれて、相手との距離、声の大きさ、発言内容の適切性が増した。しかし、視線、表情、姿勢は、よい変化が認められなかった。逐語記録によると、話し手に注目する時間が増えたが、集中が続かない様子が見られた。自ら友達とかかわる場面が増えたが、友達と意見が合わない、否定的な発言も見られた。</p> <p>4 担任教諭による対象児童の評価の変化</p> <p>対象児童は、友達との会話を楽しみ、経験を発表できるようになってきたが、相手を意識した言動に課題が継続して見られると担任教諭は捉えている。</p>
<p>IV 考察</p>	<p>研究の成果は以下の通りである。対象児童の行動観察と分析を継続し、児童理解に基づいてSSTを実践したことが、意欲の高まりと標的スキルの意識付け、一部のスキルの向上につながった。全てのSSTで友達との交流場を設定したことが、対象児童と学級の友達とのかかわりが増えた一因と捉える。思い通りにならない経験も、自己の内面と向き合い、不安や不満を表現する機会となった。</p> <p>一方、SSTによる対象児童の社会性の改善には至らなかった。その要因は、標的スキルを活用できたときの賞賛や励ましが不十分だったこと、対象児童が、初めてのこと、苦手なことへの抵抗感が強く、活動自体に取り組めないことがあったため、ソーシャルスキルの習得よりも友達とのかかわりを楽しむことや共感性などの情緒面に焦点を当てたことなどが考えられる。</p> <p>今後、児童の実態を多面的に理解し、児童のニーズや課題に合った標的スキルを選定し、どの児童にも分かる、意欲をもてるSSTを段階的に指導する。標的スキルの日常化のため、児童への意欲付けと、SSTへの組織的な取り組みを目指す。</p>